

【天気予報及び概況】

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。

	平均気温（℃）	最高気温（℃）	最低気温（℃）	降水量（mm）
2024年	22.5	27.1	18.8	302.5
2023年	22.5	26.8	19.0	172.0
2022年	23.2	28.0	19.1	64.5
1991～2020年	22.7	26.8	19.3	175.8

※気温については、1ヶ月の平均値（気象庁）

【作物】

水稲の管理

1 病害虫防除

サンエース箱粒剤を1箱当たり50g施用（移植当日）してください。いもち病、紋枯病、稲こうじ、ウンカ類、イネミズゾウムシ、ツマグロヨコバイ、イネドロオイムシ、イネツトムシ、コブノメイガの総合防除剤です。

2 水田雑草防除（除草剤散布）

農薬名	使用時期	使用量/10a	使用回数
エンペラージャンボ	移植直後～ノビエ3葉期	25gパック10個	1回
ジェイフレンドフロアブル	移植後5日～ノビエ3葉期	500ml	1回
カチボン1キロ粒剤51	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期	1kg	1回
天空1キロ粒剤	移植時・移植直後～ノビエ3葉期	1kg	1回
ラオウ1キロ粒剤	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期	1kg	1回
エンペラー豆つぶ250	移植直後～ノビエ3葉期	250g	1回

【使用上の注意点】

- (1) 田面の凹凸が無くなり均平になるように耕起・代かきし、丁寧に畔塗りして漏水防止に努めましょう。
- (2) 除草剤散布後3～4日間はそのまま湛水を保ち、田面を露出させないようにしましょう。
- (3) 除草剤散布後7日間は落水、かけ流しはしないようにしてください。（田面が露出し、入水が必要な場合はゆるやかに入水しましょう）
- (4) 藻類の発生が多い場合は、薬剤の拡散が妨げられるので、ジャンボ・フロアブル・豆つぶ剤は注意しましょう。 <松本>

【野菜】

梅雨を迎え、高温多湿条件下では病気の発生が助長されます。耕種的防除として、マルチや敷きワラを行い土壌からの病原菌の跳ね上がりを防止してください。また、風通しや採光性を良くするために適宜、枝や葉の整理に努めましょう。長雨で畝溝に水が停滞すると根傷みを起こし株が弱るので注意してください。

1 きゅうり

収穫期を迎える頃に親つるの古い葉を段階的に摘葉（1回に3枚まで）し、出てくる若い側枝に十分光を当て、新葉の発生を促します。

収穫開始以降は、畝内の土壌水分が安定する状態を保つよう適宜、灌水をするとともに、定期的に追肥をしてください。

2 トマト

降雨や曇天により光合成量が低下すると落花の原因となるため、適切なホルモン処理（トマトトーン100倍液噴霧）を行い、着果促進に努めてください。

また、梅雨入り前には株元に近い古い葉を取り除き、風通しをよくしてください。

3 なす

仕立ては、第1花の下腋芽と第2花の下腋芽を活かして3～4本の主枝を取ります。

収穫開始以降は、肥料切れしないよう定期的に追肥をしてください。また、土壌の乾いた状態が続く時は灌水も同時に行ってください。

4 かぼちゃ・すいか

本葉5～6枚で摘心し、子づる3～4本仕立てにするのが一般的です。最初の着果節位までは、発生する孫づるを全て切除しましょう。 <土居>

【栗】

今月は、栗の開花期です。この頃になると、新梢伸長量や着毬量などから、作柄の予想ができます。

安定生産のためにも次の点に留意し、管理作業を行ってください。

1 夏肥の施用

6月中旬～下旬が夏肥の施用時期です。果実肥大を促すために必要な肥料ですので、事前に除草作業を行い、肥料が効果的に吸収されるようにしてから施用してください。

施用量は、成分量で窒素4kg、リン酸2kg、加里5kg/10aです。

2 病害虫防除

(1) クリイガアブラムシ

開花時から収穫期まで毬果を加害し落果させます。毬果への寄生は6月下旬から始まり、寄生を受けた毬果は発育が止まり、イガは褐変して8月前半までに落果します。遅く寄生を受けた毬果は、収穫期前の未熟果で裂開（若ハゼ）します。

開花後6月中旬～7月下旬に、アドマイヤー水和剤1,000倍を散布してください。

(2) シロスジカミキリ

6月になると樹の主幹部に円形の傷が見かけられるようになります。これは産卵痕です。傷の1cm程度上を木槌で軽く叩いて卵をつぶしておきましょう。

(3) 実炭疽病

樹体の枯れ込み、枯れ枝が病原菌の発生源となります。6月中旬～8月までの間にベンレート水和剤2,000倍を2～3回散布してください。

<三谷>

【シキミ】

1 炭そ病

葉の縁から褐色の不定形病斑が形成され、激発するとほとんど落葉します。5～8月に発生が多くなります。発病した茎葉は早めに取り除いてください。

2 シキミグンバイムシ

体長は4～5mm程度で、葉裏に寄生して吸汁加害します。被害葉は表面が白いカスリ状になる他、葉裏に糞や脱皮殻が付着し外観を損ねます。

4～10月まで繁殖を繰り返し、再発もしやすいため、発生圃場では初回防除から1～10日後の再防除が効果的です。葉裏によくかかるように散布してください。

3 フシダニ類

体長は0.15～0.2mm程度で、葉に寄生して吸汁加害します。被害葉にはモザイク状の輪紋が発生し外観を損ねる他、葉の黄化や奇形葉を誘発します。

4 防除薬剤

6月下旬～7月上旬に、定期防除として殺菌剤のベンレート水和剤2,000倍、殺虫剤のオルトラン水和剤1,000倍、ダニ剤のピラニカEW1,000倍を混用散布してください。

ミツバチの巣箱の近くや、茶園や他の作物を隣接して栽培している場合は、農薬の飛散に十分注意してください。 <佐津間>

【茶】

1 一番茶後の整枝と遅れ芽の剪除

良い二番茶を取るため、一番茶摘採7～10日後に整枝を行い、深さは一番茶の遅れ芽を除去する程度に浅く摘採面を揃えてください。

一番茶の整枝の程度により、遅れ芽が出てくるので剪除してください。

遅れ芽が二番茶に混じると品質が低下します。

2 二番茶の摘採

一番茶摘採後、約45日で二番茶の摘採ができます。新芽が硬化しやすい時期であるため、摘採期（出開度50～80%）を逸しないように注意してください。また、気温が高いため、摘採した生葉のむれや葉傷みに特に注意してください。

二番茶の摘採や後の浅せん枝を行うことで病害の防止になるとともに、翌年の一番茶の芽数を増やし増収につながるため、できるだけ摘採してください。

<松本>